

戦争と文学



宮地 智子

(詩人)

ひとは、生まれる場所も、その時代も、自ら選ぶことができない。文字通り、生まれ落ちるのである。

私が生まれ落ちた年は昭和二十二年。場所は、戦災から逃れて一家が暮らしていた疎開先である。

戦争を知らずに育ったこの年代も、もはや七十代を迎えている。この歳に至って気付いたことがある。いや、こんな言葉では生ぬるい程の経験をしていると言つてよいと思う。きっかけは、『今村均大将回想録』を読んだことによる。

私達は、日本の近現代について殆んど教えられていないため、また、戦後のG・H・Qによる、日本軍悪玉論を刷り込まれているためか、どうしてもその部分を曖昧にし、事実を知るところを避けてきたのであり、むしろ、インテリほど、日本の犯した過ちを厳しく断罪し、その戦争責任を、当時の指導層に向けて追求し続けているように思われて仕方がない。主要なメディアもまた、同様の傾向にある。

日本人としての誇りを奪う、このような風潮のなかで育った若者でも、恋をし、夢を描き、歌も生まれる。アートの世界ではテクノロジーの進歩も手伝って目新しい作品も次々と生まれる。では、文学の世界はどうであるか。漱石、鴎外に匹敵する国民文学というものはや生まれもないのだろうか。

ノーベル賞候補になった作家も多くの読者を獲得しているようであり、海外でも翻訳され読まれてはいるが、水村美苗も指摘しているように、例えば夏目漱石が英語に翻訳されると、その日本語の魅力が伝わらない、という事情を考えると、ことは、日本語の危機という問題にもぶつかる。

結論から言うと、私は『今村均大将回想録』を、文学作品として捉えたいのである。

全四巻からなる、この本は、私を大きく変えたからであり、私は初めて祖国・ナシヨナリズムに目覚めた、という言葉

い方もできるけれど、余りしつくりと来ないのは、ナシヨナリズムという言葉の定義がはつきりしないからである。けれど紛れもなく、かつて日本に

は、国を守るために全身全霊を捧げて戦った多くの軍人がいた、ということであり、一般の成人男子は徴兵制を当然の義務としてその責務を果たしてきたのである。明治三十八年生まれ私の父もまた、その中のひとりであった。

戦時中、『糞尿譚』によって芥川賞を受賞した火野葦平が、そのために従軍記者として召集され、あるいは一兵士として参戦した、その見聞を克明に記した作品群もまた、紛れもない文学であり、読む者の魂をゆさぶるのは、そこには、愛、としかいいようのない、人間性の至高の美しさが描かれているからであり、そのような視点ですべての事物（自然も、軍馬も、兵器でさえ）が描かれているからである。しかしながら、南方の戦線においての苛酷さは筆舌に尽し難く、読者にとって語り進めるのが余りに辛い。作者は、

極限まで追い詰められた人間を適確に捉え、このような悲惨さに至らしめた、この戦いに対する疑問を呈し、果ては、「敵はイギリスではなく、軍司令官だ。」と叫んで、理不尽な命令を下した上官に殺害を企てる兵士など余すことなく描いている。

火野葦平は云っている。「戦時下においてその義務を果たさない人間を私は信用できない。それは好戦的ヒロイズムとは別個の問題で、一直線に人間そのものの根底に通じている人格論である。」（新潮文庫 「土と兵隊・麦と兵隊」解説 河盛好蔵 より）

〈人間性の問題〉、文学以外に、この問題を追求する手段はないのではないだろうか。

火野葦平は一兵士としての視点から、今村均は陸軍大将の視点から、その、人間性について考察している、と言えないだろうか。それは、永遠に解けない謎でもあり、愛についての問題でもある。

「もつとも充実した行動の軌跡を描

くときすべての文章は美しい」と江藤淳が言ったと同じ意味で、私は、『今村均大将回想録』を文学作品として読んでいます。

明治十九年、仙台市に生まれた今村均は、判事であった父の勧めで、文学方面を目指していた。なぜなら父は、人間を裁く、という判事の仕事に、罪悪感に似た苦痛を感じていたからである。

その父が早世したため、陸軍士官学校に入ったのは、経済的な理由と、母の勧めによる。

軍人としての人生が不本意に始まったものの、国を勝利に導くための、軍人としての成績はみごとであった。

満州事変の時は、建川美次作戦部長の下、作戦課長として、戦火の拡大を阻止すべく尽力する。第一次上海事変では、海軍との協力を緊密にし勝利。但ちに撤退したため、日本が中国大陸を侵略する、という国際的な疑いを払拭する。支那事変前後は、関東軍参謀副長として、参謀長板垣征四郎のも

と、新京に赴任。昭和十三年六月、板垣征四郎が陸軍大臣に任命された時には、密かに今村均に相談している。それに対し「あなたは情にもろいから、何ごとも慎重に判断するように」などと警告もしている。

昭和十四年から十五年にかけての南寧作戦では、飢餓に苦しみ、増援軍を得て勝利。この時の経験を反省し、敗戦を迎えた南洋、ニューブリテン島のラバウルでは、七万人もの兵士を飢餓から救うのである。

敗戦を覚悟し、事前に日本から植物の種や農機具などを取り寄せ、看護婦と慰安婦のすべてを帰国させ、地下に巨大な都市を造営して、自給自足に成功して、敗戦を迎えるのである。このような偉大な陸軍大将の話は、もっと知られるべきだと思う。



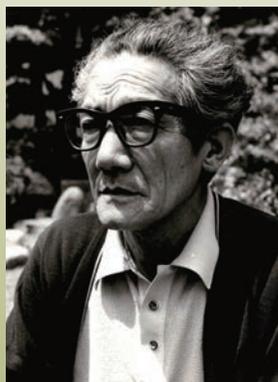


香川の商業デザインを牽引

和田邦坊

「わだくにぼう」

灸まん、名物かまど、ひょうげ豆、山田家うどん、巴堂のぶどう餅など、香川を代表する物産品の数々。そのすべてのパッケージデザインを手がけたのが和田邦坊である。晩年まで精力的に活動し、香川の商業デザインを牽引し続けた、知る人ぞ知る巨匠。力強い文字と奔放に描かれた絵には、誰もが懐かしさを覚える不思議な魅力がある。



和田邦坊
(1899-1992年)
琴平町生まれ。画家、小説家、デザイナーなどマルチな才能で活躍する。棟方志功、イサム・ノグチ、猪熊弦一郎などと交流があった。

取材・画像提供：灸まん美術館



画家であり、小説家であり、デザイナー。 多彩な才能から独自の世界を生み出す。

琴平に生まれた和田邦坊は、画家を目指して上京し、
紆余曲折を経て新聞漫画家として就職する。小説家として
も人気を博し、多くの連載を抱える売れっ子として活躍
した。しかし忙しい日々々に疲れ、昭和13年に帰郷。農事
講習所の講師として教鞭をとることになった。その後、
当時の金子正則知事に招聘され、栗林公園内にある讚岐
民芸館の初代館長に就任。民芸の普及活動に努めなが
ら、地元の物産品のデザインも手がけるようになる。

その仕事の進め方は、デザイナーというよりもプロ
デューサーに近い。まず商品の位置づけを練り、デザイ
ンに加えて軽妙な筆致で商品コピーまで書いている。そ
の卓越した仕事ぶりから依頼が殺到。昭和中期は、邦
坊のデザインこそ香川のデザインであった。



香川の民芸品・張り子人形を邦坊流にデザインした「おとぼけ人形」。
未発売のままに終わった幻の品。





商業デザイナーとして人気であったが、邦坊本人は画家を本分としていた。代表作は香川県庁の「讃岐の松」。
写真は紅白の梅を描いたぶすま絵。



包装紙を広げると、作品としての魅力が伝わってくる。



東京の店に依頼された装飾絵。邦坊の仕事は全国に知られていた。



いつまでも心に残るパッケージ。

見ても、私は優しさを感じます」。西谷さんは、香川の人なら邦坊デザインをより楽しめるといふ。というのは、多くのパッケージに見覚えがあり、昔の記憶を呼び起こされるからだ。邦坊のデザインは、思い出を生むデザインでもある。



香川県人なら何かしら思い出があるはず。

和田邦坊について研究している灸まん美術館の学芸員・西谷さんに邦坊の魅力についてうかがった。「商業デザイナーとして注目される邦坊ですが、本人は最後まで画家であることにこだわっていました。包装紙を広げてじっくり見ると、そこには邦坊の世界が広がっています。どの作品を見ても、私は優しさを感じます」。西谷さんは、香川の人なら邦坊デザインをより楽しめるといふ。というのは、多くのパッケージに見覚えがあり、昔の記憶を呼び起こされるからだ。邦坊のデザインは、思い出を生むデザインでもある。



西谷美紀さん
灸まん美術館学芸員。邦坊の研究を続けており、2017年「和田邦坊デザイン探訪記」を上梓した。

灸まん美術館・和田邦坊画業館
普通寺市大麻町338
tel/0877-75-3000
開館/9:00~17:00(入館16:30)
休/水曜



千日紅

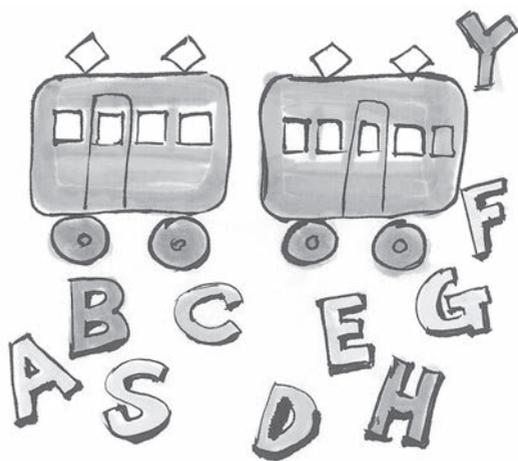
中西美子



お彼岸にお墓参りに行くのは、誰のためでもない自分が気持ちいいからです。お墓参りに行ってみると以前にはあつたはずの花屋が、なかつたりしています。浅草なのに、お寺だらけなのに。ともすればシルバー人材のおじいさんらしき人が会議室のテーブルみたいのを並べて、俄か花屋の番をしていたりします。また墓地にやけに綺麗な花がお供えしてあるかと思えば造花だったりすると、興奮めます。家の仏壇のお花も夏場は、特に生花は、買わないと知人は、言っていました。プリザードフラワーとか造花をお供えしているとのこと。病院のお見舞いのお花は、ダメだし、普段使いの花もそんなに飾らないだろうし、花の需要が少ないと花屋さんも大変でしょうね。夏の仏花として人気のあるのが夏から秋にかけて咲く千日紅だそうです。いつまでも鮮やかな色彩を残しつつドライフラワーになるからです。暑い時期の仏壇にはもってこいというわけです。花のように見える松かさのひっくり返ったようなところは、花ではなく花の根本にできる葉っぱで葉苞というものでしおれずにドライフラワーになるのです。描いたのは、下のほうがピンクで先端に向かって白くなっている可愛い千日紅です。本来は赤紫色が多いですが、最近は白や真つ赤な種類も出回っています。私の仕事が植物画の講師なのでモデルのお花が余ります。幸せな事に我が家の仏壇には、毎日きらすことなく生花をお供えてきています。

電車に乗れば英語の勉強

片岡義男
(作家)



平日の午後、いつもの私鉄の電車に乗る。空いている時間だから座席にすわり、ぼんやりしていると、車掌のアナウンスをなんとなく聞く。次の停車駅の名を告げたあと、「左側のドアが

開きます」と彼は言う。続いて外国の女性による録音メッセージで、おなじ内容が繰り返される。彼女の最後のひと言は、
The doors on the left side will open.

というものだ。ドア、電車、あるいは車掌の意思により、「左側のドアが開くかもしれません」と、僕は理解する。このひと言を聞いたたびに。日本人男性の車掌は、「左側のドアが開きます」と断言している。それが外国人女性のメッセージだと、左側のドアが開くかもしれない、となる。これは、なぜなのか。ずっと以前から僕にとっては謎のひとつだ。

ドアの上にデジタルによる表示がある。いろんな表示がおなじ順番で繰り返しあらわれる。「こちら側のドアが開きます」という日本語の表示にならんで、Doors on this side will open. と英語による表示があらわれる。「こちら側」でなければ開くのは「反対側」であり、それは英語で the opposite side となる。それはいいとして、どちらの場合にも、動詞には開くがつか。ひよっとしたら左側のドアが開くのかな、と僕は常と思う。「経堂の次は下北沢に停まります」というような日本語のアナウンスも、

それに続く英語だと、「The stop after Kyodo will be Shimokitazawa. となく、ここでも 止に遭遇する。

向ヶ丘遊園という駅が終点の下りに乗っていると、「The next stop is Mukogaokayuen terminal. という英語のメッセージを聞く。向ヶ丘遊園駅はけっしてターミナルではない。その電車がたまたま向ヶ丘遊園駅までのものであるに過ぎない。だのになぜ、向ヶ丘遊園駅がターミナルになるのか。英語だとわかりやすく簡略化する、という癖が日本人たちにあるとするなら、これはその一例なのか。

「ふりかえ輸送中」という日本語は alternate services in operation と英訳されている。なんらかの理由でしばらくは電車が止まるとき、「他社線へのふりかえ輸送中です」とアナウンスされるが、乗客がどのようにすればいいのか、まったく不明だ。Alternate services とは、いったいなのか、明らかにする責任がその私鉄にはあると僕は思う。

新幹線に乗っても英語の勉強はついでまわる。リクライニング・シートという言葉を好みに応じて自在に変えることの可能な座席、という意味を端的にしかも少ない語数で言いあらわすことが、日本語には出来ない。だからリクライニング・シートという英語が、片仮名書きされて日本語になる。

のぞみ二十五号には、少なくとも僕が乗ったときには、喫煙ルーム、と呼ばれるものがまだあった。車両の端の、通路に接した壁ぎわの、じつに狭い場所だった。喫煙室、あるいは喫煙所と呼ぶにはあまりにも狭いし、しかもたなく作った、ということも明白だったから、ここに漢字を使うわけにはいかない。エリア、プレイス、ルームなどの候補のなかからルームが選ばれ、喫煙ルームとなった。喫煙室とは明らかに一線を画されたものとしての、喫煙ルームなのだから、ここでのルームは室の単なる英訳ではない。室とは明らかに異なったものとしての、ルーム

なのだ。

前の座席の背にたたまれたテーブルの、たたんであるときはこちらを向いている側に、いろんなことが印刷してある。その一番最初にあるのは左右ふたつの方向を指した矢印で、左を指している矢印には、博多方面、という日本語が添えてあり、右を指している矢印には、東京方面、とあった。そして博多方面は For Hakata と訳され、東京方面は For Tokyo となっていた。

この For はいまだに現役だ。▶ train bound for Tokyo. という言いかけたのなかから、for Tokyo だけを抜き出し、それが「東京行き」あるいは「東京方面」と解釈されたまま、いまも通用しているのではないか。いつも乗る私鉄の上り新宿行きでは、その行く先が英語ではないまでも、For Shinjuku と出る。For になにほどか引きずられる僕は、新宿がいったいどうしたのだろうか、などと思うが、どうもしていない。その電車の終点は、新宿駅なのだ、それ以上でもそれ以下でもない。

原田種夫の書

三月十七日（平成三十年）、電話で親しい古本屋司書房（中野照司）に古本用語についての質問をしたとき、原田種夫のことを訊かれた。原田の署名と歌を書いたものを入手したといい、それは糸で綴られ何人かの文人・画家が書いたもので、司書房は原田の書いた一枚だけを持ち帰ってきたという。原田種夫は、福岡の小説家で、その作品は何度か芥川賞・直木賞候補になっ



た。原田が所属した同人雑誌「九州文學」には、岩下俊作や火野葦平、劉寒吉らがあり、後には「島原の子守歌」の宮崎康平も参加した。原田の書いたものは、

九州の七万石
巻をゆけど
知る人もなく

原田種夫

志^し村^{むら}有^{くに}弘^{ひろ}
(相模女子大学名誉教授)

海道東征
関門海峡の
彼方より
征めのぼる日も
遠からじ

九州文学社 社長 原田種夫

—○—
というのが全文。区切りを示す「—
—」も墨で書かれたものである。

「九州の七万石」というと、原田が住んでいた福岡周辺では、豊後竹田（岡藩）七万石を想起するが、これはむしろ推測である。書かれた内容は、「九州の七万石の城下町の中を歩いていったが、知る人は誰もいなかった」というくらいの意味。「海道東征」といえば、北原白秋の『記紀』を踏まえた交声曲詩「海道東征」を思い出す。

昭和十六年（一九四一）、白秋は「海道東征」で福日文化賞を受賞することになり、その授賞式が三月十七日に福岡で開催されることになった。一方、原田は処女小説集『風塵』を二月にモナス社から上梓していて、その出版記念会を三月十五日に設定し、文学の師である白秋が西下したおり、記念会に出席してもらいたい旨の速達を送った。白秋から「一五ヒヨル、キミヲシユクフクスル、ハクシユウ」という電報が届いた。「十五日夜、君を祝福する、白秋」の意。

白秋は三月十五日の昼近くに九州入りしたので、原田は妻と共に、門司駅

で「多磨」一門の人たちと出迎えた。白秋は「君のために一日早く来たんだよ、今夜は、日比谷公会堂で、『海道東征』の演奏会があるのだが……」と笑顔で言ったという（原田種夫「北原白秋先生の遺書」、九州時代、昭和五十八年十一月）。

その白秋は、翌年の十一月二日、この世を去ってゆく。原田が書いている「北原白秋先生の遺書」とは、原田宛の書簡で、北原兄弟が毎年五百円ずつ出すから、文学振興のために九州文学賞を設定せよと書いてきたことである。前掲原田書の「海道東征云々」は、おそらく白秋の「海道東征」を念頭に置いて書いたものであろう。

私は原田種夫一家とは親しい交流を持っていた。三十年前の平成元年（一九八九）八月、原田種夫葬儀のりには弔辞を読むという悲しい体験もした。前掲の原田が書いた書は、司書房から古書として譲ってもらい、今は私の手元にある。司書房は私が電話をかけてきたので、原田種夫のことを尋

ね、原田の書は私に譲り渡される形になった。

私は三月五日（平成三十年）、第七期「九州文学」発行・編集人の波佐間義之から原稿執筆の依頼を受け、三月十五日、「北原白秋の水脈」なる拙稿三十数枚を送った。それは原田のもとに白秋の遺書が送られてきたことや白秋の「海道東征」前後のことを書いたものである。

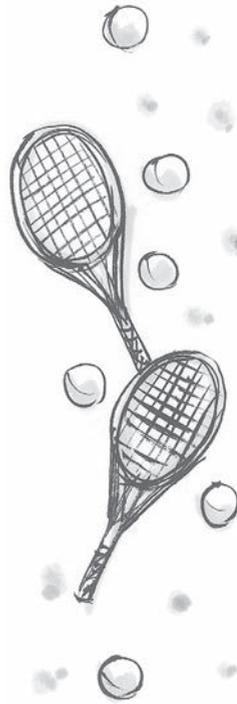
時間が前後するけれど、三月九日、司書房が古書会館から「海道東征」を踏まえた原田の書を持ち帰り、そのころ、私は「北原白秋の水脈」稿を書きつつあった。三月十七日、私は、司書房に電話をかけたとき、原田のことを訊かれ、司書房から原田の書を譲り受けることができた。およそ十日間のあいだに、北原白秋・原田種夫に関する出来事が続いていた。今は、少し自惚れて、亡き原田種夫が自分の書を、中野照司を通して譲り渡してくれたのではないか、と思っている。

大統領夫人の機転

―バーバラ・ブッシュ夫人の思い出

池井 優

(慶應義塾大学名誉教授)



第四十一代アメリカ大統領ジョージ・ブッシュ夫人バーバラさんの計報が伝えられたのは、安倍首相が訪米し、トランプ大統領と会談中の四月十八日のことであった。ご存知のようにアメリカの大統領夫人はファーストレディと呼ばれ大統領と共に行動し、注目される存在である。トランプ大統領のメラニア夫人、レーガン大統領のナンシー夫人、ケネディ大統領のジャクリーヌ夫人などファッションを含め話題になることも多い。

ブッシュ大統領が国賓として日本を

訪れたのは、一九九一年十二月のことであった。ブッシュ大統領はスポーツマンだった。イエール大学時代は、野球部でファーストを守り強打の左打者として知られ、キャプテンとして同校を訪れたベーブ・ルースと握手したこともあった。大統領の日程のなかに天皇陛下、皇太子殿下とのテニスの試合が組み込まれたのは親善の一環としてメディアにもアピールできる素晴らしいアイデアであった。一月五日皇居内のテニスコートで、天皇・皇太子対大統領・アマコスト大使のダブルスの

ゲームが行われた。第一セット、天皇・皇太子ペアが一方的に勝った。一セット終わったところで、天皇陛下はお茶をすすめたが、大統領はスコアをタイにしたいからとすぐに第二セットが開始された。しかし、このセットも天皇・皇太子側の勝利に終わった。天皇、皇后両陛下をはじめ皇族の方々と軽食をともしながら欲談したのち、大統領は一端迎賓館に戻った。顔色もよく、異変の気配は全く感じられなかった。

その日の夕方、首相官邸の晩餐会に

出席する直前、スコウクロフト補佐官がアマコスト大使にささやいた。「大統領は気分がすぐれない。晩餐会の進行を早めて欲しい」。

会場に入ってきた大統領は顔面が蒼白でいつものような快活さがなかった。食事が半ばまで進んだころ、大統領はしきりに後ろを振り返った。出口を探しているようであった。しかしメインテーブルの背後には退路をささぎるように、見事な屏風が端から端まで立てられていた。テーブルに向き直った直後、大統領は意識を失い、食べたものをすべて吐き、頭を宮沢首相の膝にもたせかける形で床に崩れ落ちた。場内は騒然となった。その時であった。バーバラ夫人は夫の傍に駆け寄り、落ち着き払った態度で会場の皆に呼びかけた。

「ヒーズOK、ヒーズOK、ヒーズOK、ヒーズOK」(彼は大丈夫…)と三回も繰り返した。夫人は大統領の体調を誰よりもよく知っており、大統領一行のあいだで流行っていたインフルエン

ザの症状を見てとったのだった。

大統領の意識はすぐ戻ったが、そのまま回復するとは思えなかった。その模様は同時中継をしていたテレビで伝えられ、ニュースでも何回も流されることになる。大統領はすぐ宿舎に戻った。

大統領に代わってスコウクロフト補佐官が乾杯をおこない、宮沢首相は会場に残ったバーバラ夫人にスピーチを求めた。夫人はアマコスト大使に目配せをすると、こう語りはじめた。

「これはすべて大使の責任です。今日の午後、大使は大統領とベアを組んで天皇陛下、皇太子殿下とテニスをやらせていただきましたが、惨敗しました。それで夫、ジョージは気分をこわしたのです！」

アマコスト大使をにらみつけながら話し終わると、一転して満面の笑みを浮かべ、深刻なムードになっていた会場をどっと沸かせた。テレビがとらえた無残な光景を、ファーストレイディアが見事なユーモアで救ったのだった。

翌日の朝、すっかり回復した大統領のもとを訪れたアマコスト大使にバーバラ夫人は言った。

「あなたは昨夜の私の言葉を一生許さないでしょうね」

「とんでもありません。大使はそういう役目のためにいるのです」

ちなみにバーバラ夫人は高校生時代にクリスマスのダンスパーティーでジョージと知り合い、名門ミスカレッジを二年で中退して結婚、五人の子どもに恵まれた。長男が六十三代大統領となったジョージ。長女ロビンが白血病になったため髪の毛が真っ白になり子供たちからは「シルバー・フォックス」と呼ばれた。その経験から白血病に対する関心を深め、ボランティア活動に努め、全米白血病協会の名譽会長を引き受けた。ファーストレイディアとなってもまったく気取ったところがなく、隣のおばさんのような気さくな人柄で皆に親しまれる存在であった。

スイッチ

山本 千明

(ECC 英会話講師)



そもそも「英語」などという、遠い異国の言語には、全く興味関心がなかった。

「ベルサイユのバラ」が大好きだった十三歳の夏。学校から帰宅すると一目散に二階の「勉強部屋」に駆け上がり机から「お絵描き帳」を引っ張り出す。当時、中学二年生だった私は「如何に英単語を覚えるか」よりも「如何にマリーアントワネットの巻き髪を美しく描けるか」に全精力を注いでいたのだ。

どちらかと言えば「教育ママ」だっ

た母親は親の小言もどこ吹く風のダメ娘に業を煮やして、ついに「刺客」を差し向けてきた。母の期待通りに地元の有名進学校からそのまま国立大学に入学された「努力と根性」の化身が、黒縁眼鏡を掛けたような兄上様である。

ある日、私のお部屋に問題集片手不足かずかと乱入して一言。「これを今日から一週間で十ページやっておけ」さらに「もし、万が一、出来てなかったら：夜中に土手の端から端まで歩かせるからな！」

もしもし？ お兄様？ もしや、あの裏の土手のことですか？ まるで白雪姫が置いて行かれた森のような、夜なんて暗黒の闇と化す…あのホラーズポットのことですか？ 全長二百メートルはありますわよ。

そんな恐怖を味わうくらいなら：問題集の十ページや二十ページ！

そして一週間後、締切日の夜が来た。

「何で、な・ん・で！ 二分の一しかやっとなんのや！」と叫ぶ怒りの鬼軍曹。

できれば、コップ半分の水を見て「まだ半分もある」と前向きな発想をしていただきたいところである。面白くもない問題の数々を（王妃様の巻き髪を描く時間を削ってまで）「半分も」やってのけたのに：

「約束したよな！」（私的には「強制」だけ）「今から土手を歩いてこい！」と小さな懐中電灯とヒモを一本渡された。「ゴール」にある松の木にこのヒモを結んで来いと言う。懐中電灯の弱い光に照らされてぼんやり

浮かび上がるもの全てが悪霊に見える恐怖の世界。涙と汗と鼻水でぐちゃぐちゃになりながら、自分の背丈よりも高い草を掻き分けながら悪夢の中をひたすら歩いた。

「さすがに心配やったからこそその後から付いて行ってやったんだぞ」と後日聞かされたが、私の中には只々真っ白けな「無の境地」しか残らなかった。

この筋金入りのヤル気無し中学生に「脅し作戦」は効果ゼロと学習したのか、半年ほどして「鬼軍曹」は「仏のような司令官」に変身して現れた。

「英語で手紙書いてみないか？」と「命令」ではない「提案」。大学を一年休学して自費でイギリスに留学していた兄は、その時に知り合った九十一歳の英国マダムと帰国後も文通をしていたのだ。もともと手紙を書くことが大好きな私の食指が動いた。しかもマリーアントワネット様の国、おフランスに近い国である。身近に「外国人」

とお会いする機会など皆無な時代。そんな未知の国の見知らぬ貴婦人にお手紙が届く。何だかロマンチック？

そして兄に言われるままに簡単な英語で自己紹介を書いてみた。

"My name is Chiaki. I like English"...多少、虚偽も交えながらの必死の英作文。教科書を開けば "It's a pen." で始まる「無味乾燥な英語学習」に「リアル」が吹き込まれた瞬間だった。

そしてその手紙は二週間かけてイギリスに渡り、それから更に三週間ほど後に、マダム本人から、待ちに待った返事が届く。生まれて初めて手にする「真正正銘、生の英語の手紙」に感動で身も心もプルプル震えていた。

お返事の内容は、日本からの手紙が嬉しかったこと。英語が上手だね、というお褒めの言葉（これは兄の添削の賜物）等々：文面から優しい気持ち溢れていた。

兄に手伝ってもらわないと思うように手紙が書けず、いただいた返事の解

読もままならない、という歯がゆさ。

その日から私の「ヤル気スイッチ」はカチッ！と音を立てて切り替わった。

気が付けば「英会話講師」となって二十三年。

英語という共通言語を介して世界中に友人ができた。アメリカ、イギリス、カナダはもとより、イタリア、タイ、中国、ベトナム、インドネシアなど、個性豊かな彼らと話をするだけで、どんなに多くのことを学ばせてもらえたか。どれほど人生が豊かになったことか。

この「楽しさ」を英会話講師という仕事を通して伝えてくることが、私の最優先の目標である。

あの日あの時、私の兄が「鬼軍曹」のままだったら、今の私は存在し得なかっただろうと思う。

百八十度、やり方を変えて「仏の司令官」となってくれた兄上様に、改めて心より「敬礼」をさせていたたたきたい。

季節のおくりもの

宮本 富夫

(高松大学 名誉教授)



モーニングとコーヒー豆を求め、行きつけの喫茶店へ。出会った常連の方の手に、暗い紫色の大ぶりのクワの実が十個ほど。走りの実なのだろうか。思わず目がいく、もうそんな季節になっていくのかという思いも。毎年くりかえされることなのに、季節の食べ物に心惹かれる。桑の実もその一つ。少年の頃は、この時期のおやつ代わり。近くの桑畑の桑の実をたっぷりと食べ、舌、歯茎、口の周りはお歯紫状態、手の指も紫色に染めた。おまけに知らぬ間に実に触れた上着のここか

しこが紫色に染まる。この紫色はなぜか落ちにくい。学校から帰ってそのまま出かけるものだから、白のカッターシャツをつけたままのこともあった。家に帰ると、きまつて母の小言混じりの注意。何回受けたことだろう。熟した桑の実のほんのりとした甘味の魅力に負け、母から小言をもらった少年時代、懐かしく思い出す。

田植え前の農作業の合間に、田んぼ脇にある桑の実の熟れ具合を調べる。赤い色に混じる暗い紫色、熟れ始めている。おおぶりの木も小ぶりの木も

揃って。実が大きくて美味しそうに見える大ぶりの木から試食する。味はもう一つ、期待はずれ。小ぶりの木に移り、試食を試みる。実を取ろうとすると、ヒヨドリが何羽か飛び立つ。食餌時を邪魔したらしい。大ぶりの木にはいなかったのに。不思議な思いを抱きつつ、試食する。期待していた懐かしい味が舌に蘇る。ヒヨドリはよく知っているなあと感心。彼らも試食したのだろう。美味しい方を選んでいる、丸呑みしているようにしか見えないのに。

タケノコも季節の味。「二月に掘り出したタケノコは刺身にして食べるという味だよ」と、友が言う。タケノコ特有のえぐみがほとんどないらしい。「生で食べられるよ」と。この時期のタケノコは土の中、そして小さいらしい。タケノコが好きで、鼻が効くイノシシのようにはいかない。三月中旬まで待ち、我が家の竹林でタケノコ探しを試みる。予想通り、見つけることが難しい。おまけは、畑の管理がままならず、隣接する孟宗竹の竹林から竹が

侵入してできあがった竹林もどき。タケノコを育てるための管理はされていない。竹床に草が伸び、竹の落ち葉が積もる。頼りは靴底を通して足裏に感じるわずかな出っ張りの感覚。不思議なもので、足裏に神経を集中させ、歩き回っていると、なんとなく気がかりな箇所が見つかる。掘り起こすと、確率は低いがタケノコの新生児が見つかる。この新生児は香り豊かで、えぐみが少ない。教えてくれた友人に感謝。以後、トレーニングを重ね、早期のタケノコを楽しむ。感覚がこの歳になっても開発される、うれしい。

一説に、タケノコは地下茎を伸ばしてくれている母竹の方に穂先を向けているとある。確かに、顔をのぞかせた先端部分が心なしかある方向に傾いている。タケノコと母竹、両者の立ち位置が微笑ましい。土をとり除くと、タケノコと母竹をつなぐ地下茎が見つかる。ヒトの胎児と母とをつなぐへその緒のように。鋏でその部分を切断すると、タケノコが地面からぽこっと飛び

出すように現れる。母竹とタケノコをつなぐ地下茎があると思しきところに鋏を入れるというタケノコ掘り、少し楽かもしれない。

私の在所では、タケノコの季節が、孟宗竹、淡竹、真竹と続く。淡竹や真竹は、掘ることはしない。少し背丈を伸ばした先の部分を折り、調理する。

淡竹は、そうめんやうどんのだし汁に入れ、特有のいい風味をいただく。私には、真竹のタケノコはえぐみが少なく、おいしいと感じる。

淡竹や真竹のこともあって、地上約一メートルに成長した孟宗竹のタケノコの先から五十センチメートルぐらいの部分折り、米ぬかなどを入れずに茹でる。食べてみると、えぐみとりの行程を省いたのに、ほとんどえぐみなし。不思議な気がしつつ、これも食べ方の一つかなと納得する。労力をかけてタケノコ掘りをする必要がなく、収穫期間を長くすることもできる。市場に受け入れられるなら、タケノコ生産農家には朗報となるかもしれない。春

先に出回るタケノコのイメージとは異なることが難点なら、加工用のタケノコとしての道があってもよいように思う。

タケノコの最盛期に、ワラビが顔をのぞかせる。ワラビも私にとっては、楽しみな季節の味。走りのワラビを一、二度いただく。少し粘り気のある食感と香りがいい。日当たりのいい草地で、前の年のワラビがしっかりと葉を広げ、茶色に変色した枯れ葉が残っていることがワラビ探しの目印。丈がある枯れ草の間から顔をのぞかせるワラビは、深緑色で柔らかく、見るからに美味しそう。採り立てのワラビに木灰をふりかけ、湯を注ぎ、アクをとる。一晩置くとワラビが浸された液は濃い青緑色に。この変化も興味深い。副食用に調理するか、ばら寿司の具の一つとしていただく。タケノコも具の一つ。サンショウの新葉の香りを添え、春の恵みを味わう。心満たされ、うれしい。季節のおくりものに、そして穏やかな時が流れゆくことに感謝。

不思議なウィーンの街



さかもと ふ さ

(型絵染版画家、エディター)
イラストレーター

二〇〇三年から展覧会をはじめ、ウィーンへ行くようになって十数年、来年オーストリア・日本修好一五〇周年だ。検討中であるが来年展覧会をしたいと考えている。

ウィーンの街は世界遺産に指定されている。しかし最近新しいビルや、中央駅も変わり、世界遺産が危ぶまれている。初めて行った二〇〇二年の時は——ヨーロッパの田舎だなあ——という印象だったが、二〇〇三年のEU統合の年はさすが地続きで、有名ブランドが軒を並べて街は一変した。

あまり知られていない珍しい教会がある。それはヘレンガッセにあるゴシック建築のミノリートン教会だ。この聖堂にダビンチの「最後の晩餐」のモザイク画がある。オリジナル同サイズのコピーだ。ナポレオンがモザイクの名工、ローマ(イタリア)のジャコモ・ラファエリに依頼した。一八〇九年に依頼し、パリに運ばれる予定であったが、完成した時点でナポレオンは皇帝ではなくなっていた。過去の英雄の途方もない労作の費用を背負い込んだのはかつての英雄の宿敵、マリア・テレジアの孫フランツ一世オーストリア皇帝であった。それでウィーンへ運ばれたと言われている。